

にっぽんご (3)

日伯文化普及会

教科書刊行委員会



もくじ

おはよう

けんちゃん

二ひきの字

うりのよしこ

二ひきの子

うりのにつき

とけいの

いろいろ

合

いいえ(ことばあそび)

木

木は組

音

風

二ひきの

二ひきの

二ひきの

二ひきの

二ひきの

二ひきの

二ひきの

二ひきの

おもな

ことば

今までに

ならつた

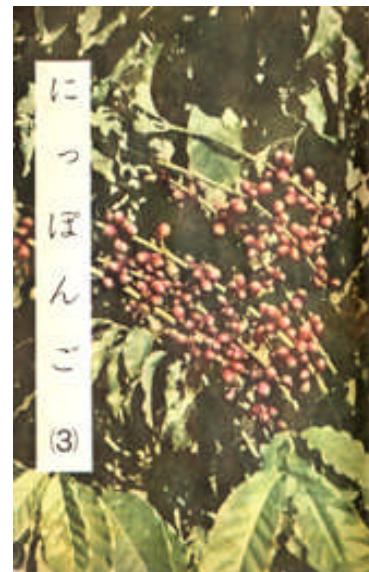
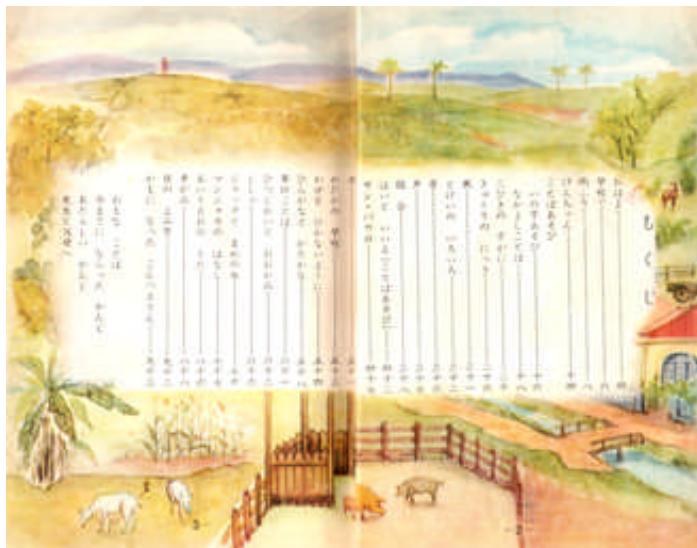
あたらしい

かんじ

先生と父母へ

かんじ

かめだかの学校
ひかないように
かたかな
おかみ
まめの木
はなし
うた
まじやックと
まじオカの
おの
うえ
うえ
うみ
よみ方
なつた
ごんべえさん



おはよう

「行つてまいります。」

わたしは、いえを出ると、
かずえちゃんをさそいに
いきました。

かずえちゃんは、もう、したくを
してまつていました。みちに出て
すぐあきらさんと、ローザさんにあいました。

「おはよう

「おはよう」

わたしたちは、ここにこしてあいさつをしました。
がつこうのちかくで田中先生にあいました。

「先生、おはよう。」

「おはよう。一年生をつれてきてあげたのね。」

先生は、かずえちゃんの

あたまをなでました。

かずえちゃんは、

はずかしそうにわたしを見ました。

(新漢字 田先生年)



学 校 で

パシッ パシッ パシッ。

にわで、なわとびの 音が
して います。わたしは、

まどから のぞいて 見ました。

みんな まつかな ほつべたで、
そろって かるくい とんで、 います。
ひい ふう みい。

チリン チリン チリン

しようかの じかんが

はじまりました。

先生の 声に 合わせて
うたいます。

たのしい きれいな うた声が、

きょうしつい っぱいに ひびきます。
ラン ラン ラン

ラン ラン ラン。



雨 ふり

雨が ふり出しました。

「ああ、やつぱり ふって きた。」

と、ぼくは ひとり「とを いいました。

ひるぎはんが すんで、ぼくが

学校へ 出かける とき、おかあさんが

「夕方は 雨が ふるかも しれない。

かさを もつて いきなさい。」

と いいました。こんなに いい 天気なのだと、

おもいましたが、ぼくは かさを もつて 出ました。

べんきょうが おわっても、まだ 雨が やみませ
ん。そして だんだん さむくなつて きました。

かさを もつて こなかつた 人は、ろうかや

げんかんで、雨の やむのを まつて います。

まちきれないで、かばんや しんぶんを あたまに
のせて、走つて いく 人も います。

ぼくが、げんかんに 出ると としおちゃんが

(新漢字 雨 天 気)

(007.jpg)

なきそうな かおを して

立つて いました。

としおちゃんは、一年生で
ぼくの いえの ちかくに
ひっこして きたばかりで
す。

ぼくが、

「としおちゃん、いつしょに
かえろう。」

と いうと、

「うん。」

と いつて、かさの 中に はいつて きました。
でん車どおりに 出ると、雨が ひどくなつて
きました。ぼくは、としおちゃんの かたを だいて
歩きました。

しづくが ぼくの せなかに、ポタポタ おちて
きます。

「マリオさん、せなかが 半分 ぬれて いるよ。」

(新漢字 車 歩 半 分)

(008.jpg)

「いいよ、ぼく 平気だよ。」

ぼくたちは、からだを よせあつて 歩きました。

「ときどき そばを とおる じどう車が、ぼくたち



に どろ水を とばして いきました。

「あつ、おか（／＼）あ、きんだが

としおちゃんが、大きな 声で いいました。

見ると、むこうから としおちゃんの おかあさんが、
かさを もって むかえに きました。

「まあ、まあ、マリオさんの かさに 入れて
いただいたの。

よかつたわね、としおちゃん。」

と いつて、それから ぼくに

「どうも ありがとう。

すみませんでした。」

と、おじぎを しました。

ぼくたちは、雨の 中を

いつしょに かえりました。

(新漢字 平)



けんちゃん

おかあさんが、

「タはんの よういを しますから、けんちゃんと
あそんで やって ちようだい。」

と、いいました。

わたしは、けんちゃんに じどう車の え を
かいて やりました。けんちゃんは、にこにこして
見て いました。できあがると、それを もつて
にわに 出ました。

「ブー ブー ブー。」

よろこんで 走り回つて いましたが、ころんで
わあつと なきました。わたしが びっくりして
かけようと、けんちゃんは
すぐ、おきました。そして

前よりも 大きな 声で、

「ブー ブー ブー。」

と、いいながら、

また 走りはじめました。



「ことばあそび

きょうは 雨ふりです。

はるえさんたちは、マリオさんのうちに
あつまって ことばあそびを しました。

はじめに「いの字あそび」です。

マリオ「しまいに『い』の字の つく ことばを
さがしましょう。」

はるえ「空が 青い。どこまでも 広い。」

よしお「くもが 白い。花が 赤い。」

つとむ「汽車は、はやい。せんろは 長い。」

ローザ「夏は あつい。冬は さむい。」

のぼる「学校は ちかい。びょういんは とおい。」
みちえ「まだ あるわよ。さとうは あまい。」

よしお「それなら しおは からい。」

ローザ「にいさんは セイが 高い。」

つとむ「じやあ ぼくは ひくい。」

あとから あとから 出て きました。

(新漢字 字 空 広 花 汽 長 夏 冬 高)

「んぢは 「なかよし」とば」です。

はるえ「では わたしから はじめますよ。つべれ。」

マリオ「いす。」

よしお「ズボン。」

つとむ「うわぎ。」

みちえ「きもの。」

ローザ「おび。」

のぼる「えんぴつ。」

あきら「カーデルノ。」

マリオ「前。」

よしお「かっぽ。」

つとむ「牛。」

のぼる「ペスト。」

みちえ「糸。」

あきら「ミシン。」

はるえ「あら、糸なら はりの方が なかよし

でしょ。」

ローザ「糸だつたら きれでも いいわ。」

(新漢字 糸)



「わたの 子がに

とびが 山の 木に とまつて
休んだ とき うみから もつて
きた 貝がらを おとしました。

貝がらの 中には、一ひきの
子がにが はいつて いました。

一ひきの 子がにが、
「早く かえりう、うみへ かえりう。」
と いました。

うみは どっちの 方か わからないよ。」
と もう一ひきの 子がにが
いました。

「下へ 下へと 歩いて みよう。」

と いいながら、一ひきの 子がに
は 山をおりて いきました。

よわ虫の 子がにが、

「ハのくんで 休もうよ。」

と いうと、つよい 子がにが

(新漢字 休 貝 早 虫)



(013. .j p g)

「まだ 少ししか 歩いて いないじゃないか。」
と いいました。よわ虫の 子がには、なきそらうな
かおを して 歩きました。

「みちを 知つて いるの。」

「知らないけど 歩いて いれば わかるさ。」

「ひきの 子がには、林の 中の くさを かきわけ
ながら 歩いて いきました。

きれいな 水の ながれて いる 小川に
出ました。

「だれか とおるのを まつて、みちを おしえて
もらおうよ。」

と、よわ虫の 子がにが いいました。

「ここので とまつて いると、

日が くれるよ。さあ、行こう。」

つよい 子がには、先に たつて
川の ふちを ぐだつて いきました。

よわ虫の 子がには、ブツブツ
いいながら ついて いきました。

(新漢字 少 知 林 小 先)

(014. .j p g)

少し 行くと、小川は ちょっと

大きな 川に なりました。

「ながれが はやいから こわいよ。」

「はさみで しつかり つかまつて おいで。」

つよい 子がには、よわ虫の 子がにを
つれて、ごろごろした 石の あいだを
おりて いきました。

川は だんだん 大きく なつて
バナナばたけの 中を ゆっくり
ながれて いました。

つよい 子がには、ふと

空を 見上げました。

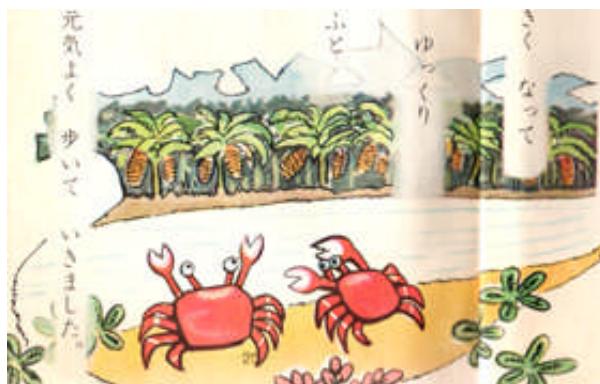
空には かもめが

とんで いました。

「うみに ちかいよ、

もう 大じょうぶ。」

一ひきの 子がには、元気よく 歩いて いきました。



五月十日 火曜

花が大きくなりました。

め花にはとびのあります。

小さいきぬうり。ついで

いました。

なんかいか しょうどく

したので、はもうつるもいき、
いきとしています。

五月十八日 水曜

一ばんはじめになつた

きぬうりが、二センチぐら

になりました。おとうさんが

もうとったばかりいよ。

といつたのもいできました。

なんだがおしいょうを

気がしました。



風

①だれが 風を 見たでしょ。

ぼくも あなたも
見やしない。けれど

木(木)のはをふるわせて、
風はとおりぬけて行く。

②だれか 風を
みたでしょ。

あなたも ぼくも
見やしない。
けれど

木立(木だち)が
あたまをさげて、
風は
とおりすぎて
行く。

(新漢字 風)

①だれが 風を 見たでしょ。

ぼくも あなたも

見やしない。けれど

木のはをふるわせて、

風はとおりぬけて行く。

②だれが 風を 見たでしょ。

あなたも ぼくも

見やしない。けれど

木立(木だち)があたまをさげて、

風はとおりすぎて行く。



とけいのいろいろ

とけいには、いろいろなのがあります。

おとうさんや、ねえさんがうでに
つけているのは、うでどけいと
いいます。

本はこや つくえの 上に おいて
おくのは おきどけいです。

かべに かけて おくのは かけどけいです。
かけどけいには、ありこの ついて いるのや
でん氣で うぐくのも あります。目を
さますのに つかう めざましどけいが
あります。それには、ベルの なる
しがけの ものや、オルゴールの なる
ものも あります。はとの
なく 声のように、じこくを
知らせるのも あります。

たるものや 高い 台の 上に、
大きな とけいを つけて、とおくから
見えるように 作つたのは とけい台です。

このほか、でんちで うごく とけいや、
ゆびわに つけた とけいなど
いろいろ あります。

むかしは、お日さまの かげで

じこくを はかる 日だけいや、すなで じがんを
はかる すなどけいを つかいました。

とけいは、ひるも 夜も 休まず うごいて、
ただしい じこくを おしえて くれます。

(新漢字 台 作 夜)

(020. .jp.g)

音

カチ カチ いうのは とけいです。

パカ パカ うまは 走ります。

かみなりは、空で ゴロゴロ なります。

コツ コツ コツは、おとうさんの くつ音です。

けんちゃんは、ピーピー ふえを ふきます。

カラーン カラン。きょうかいのかねが なります。

花火の 音には いろいろ あります。

のりものは どんな 音を たてるでしょう。

声

いえの 前で、犬が ワン ワン ほえて います。

チツ チツ チツ。小とりが うたいます。

ペストで、牛が、モウ モウ なきます。

子やぎは メエ メエ あまえます。

あひるの さんぽは、ガア ガア にぎやかです。

おなかの すいた あかちゃんは、

オギヤア オギヤアと、おかあさんを よびます。

みんな 声が ちがいます。

(021.jpg)

組合

ぼくが 学校から かえつて

くると、おかあさんが、

「少し 休んでから、組合まで

かいものに 行つて ちょうどいい。」

と いました。

ぼくの村は、えきから ずっと はなれて います。

ぼくの いえの まわりは、カフェザールや わた

のはだけです。

組合は、村の 中を とおつて いる

エストラーダのそばにあります。ぼくの
いえから三キロメートルぐらいです。

組合のちかくには、みせが

四五けんあります。

学校や村の会館も

あります。

ぼくは、しばらく休んでから
じてん車にのつて出かけました。

(新漢字組村会)

(022. -j-pag)

と中で、馬にのつた
ベネジットじいさんを、
おっこしました。

学校の前を

とおりました。

夕方なので、きょうしつはガランとして血
いました。にわで、子どもたちがやきゅうを
していました。

組合でぼくはかいものをしました。

組合の前で、となりのおじさんにあいました。

おじさんは、カミニヨンからアメンドインを
おろしていました。



村の人は、カフェーでも、わたでも、ミーリョでも、とれたものは、みんな組合に出来ます。

町からくる品ものも、一ど組合に、おろされ、それから、村のうちに、おくれられます。ぼくは、やきゅうを、ちょっと見てから、かえりました。

(新漢字 中馬品町)

(023. ジュウ

はいと いいえ (ハルヒバアソビ)

これは、二組にわがれて、おたがいに、こたえを出して、そのこたえを、あてる、アソビです。

一つの組が、そだんして、こたえを一つきめます。もう一つの組は、ひとりずつしつもんをします。そのしつもんが、あつていたら、「はい」と、いいます。ちがつて、いたら、「いいえ」と、いいます。しつもんが、おわるまでに、こたえがあたれば、かちです。

おわりの、人までに、こたえが、あたらなければ、まけです。

わたしたちは、赤と 白の 二組に わかれて
「はいと いいえ」を やつて みました。

赤「こたえが きまりました。どうぞ。」

白「それは どうぶつですか。」

赤「はい、 そうです。」

白「大きな どうぶつですか。」

赤「いいえ、 ちがいます。」

(024. .jp.g)

白「いえで かつて いますか。」

赤「はい、 かつて います。」

白「ワンワンと なきますか。」

赤「いいえ、 なきません。」

白「いえの 中に いますか。」

赤「はい、 います。」

白「一 ヤア ニヤアと なきますか。」

赤「はい、 ニヤア ニヤアと、

なきます。」

白「わかりました。ねこです。」

赤「そうです。ねこです。」

こんどは、白組が

そだんして こたえを きめました。

白「きました。きいて ください。」



赤「それは どうぶつですか。」

白「いいえ、ちがいます。」

赤「たべる ものですか。」

(025. ↗ pg)

白「いいえ ちがいます。」

赤「木で 作った ものですか。」

白「はい、そうです。」

赤「きょうしつに ありますか。」

白「はい、あります。」

赤「つくれですか。」

白「いいえ、ちがいます。」

赤「黒い 色を して いますか。」

白「はい、黒い 色です。」

赤「わかりました。黒ばんです。」

白「はい、そうです。あたりました。」

うまく あたつたので、みんな パチパチと
手を たたきました。

(新漢字 黒 色 黒)

サン・パウロ

ぼくは、おとうさんと サン・パウロに 行きました。サン・パウロは 大きな 町です。

広い みちを でん車や じどう車が、ひつきり

なしに 走つて います。

どこへ 行つても 人が
大ぜい います。

プラツサ・ダ・セーの あたり
は たいへん にぎやかです。

まわりには、高い たてものが
ぎっしりと ならんで います。

会いや ゲンこうなど、大きな みせが
あつまつて います。

じどう車や テレビを うる みせは、大きくて
りっぱです。

おかしやは、あかるくて
おいしい においが して
います。本やも あります。
レストランテも あります。

二千人も はいれる

シネマかんも ありました。

何でも うつて いる



(新漢字 千 何)

(027. jpg 左 pg上段、下段あり)

百かでんで、おかあさんと いもうとに おみやげを
かいました。

夕方に なると、うちに
かえる 人が、たくさん
でん車や オニブスを
まつて います。

夜は きれいな ネオンが
つきます。ひるのよう
あかるくて にぎやかです。



木



(上段)
や
し
の
木

アバカテの木

も も の 木

か き の 木

つばき の 木

やなぎ の 木

(下段)

木のは。木のえだ。

木の下で休む。

木に花がさく。

木にのぼる。

木をきる。

木をうえる。

木がゆれる。

木がかかる。

(新漢字百)

(028. jpg 横書き。左 jpgから)

めだかの学校

① めだかの学校は川の中、

そつとのぞいて見てごらん。

そつとのぞいて見てごらん。

みんなで おゆうぎ して いるよ。

② めだかの 学校の めだかたち。

だれが 生とか 先生か。

だれが 生とか 先生か。

みんなで 元気に あそんでる。

(029. .j p g)

かぜを ひかないように

つめたい 風の ふく 日でした。

わたしたちは、きょうしつの まどから 外を
見て いました。

先生が はいって きました。

「みんな 元気の ない かおを して いるな。」

と いつたとき、とおるくんが

「ハツクション。」

と 大きな くしゃみを しました。

「サウデ。」

と はるみさんが いつたので、みんなが わらい
ました。

先生が、

「とおるくん、さむく ないのか。かぜを ひくと



いけないよ。」

と いいました。

あきらくんが、

「先生、まさおくんの かぜは まだ なおらない

(030. .j p g)

のですか。」

と もきました。

「まさおくんは、かぜから ほかの びょう気に
なったそうだ。きのう おかあさんが きて、
しばらく 学校を 休むと いつて いたよ。」

と、先生が いいました。

まささんは、あたまが いたいと いつて、
一 ゆうかん前から 学校を 休んで います。

先生は、

「かぜを ひくと ほかの びょう気に なりやすい。
だから 気を つけなければ いけない。」

と いつて、かぜの ことを いろいろ はなして
くれました。

かぜを ひかないように するには、どうしたら
よいかと いう ことも はなして くれました。

先生の おはなしの あとで、まさおくんの
ところに、おみまいに 行く そだんを しました。

(031. .j p g)

ひらがなと かたかな

かなには、ひらがなと かたかなと
ふたとおり あります。

ひらがなは、みなさん が よんで
いる この 本や、ふだん よんで
いる 本に 出て います。

かたかなは、前の 本で ならつた 字です。
「アメリカ」「ポルトガル」「アルゼンチン」の
ような 国の名や、

「サン・パウロ」「ブラジリア」「ベレン」の
ような 町の 名、

「チラデントス」「エジソン」の うな 人の 名
や、「ピアノ」「コスマス」の うな ものの
名も、かたかなで 書きます。

どうぶつの なき声や、ものの 音なども、
かたかなで 書くと よみやすく なります。
でん車が ゴウゴウ 走つて います。
やぎが メエメエ ないで います。

(新漢字 国 名 書)

(032. 一ノ五)

かたかなの中には、ひらがなと形のよくにた字があります。

かたかなは かたちが かくばつて います。
ひらがなは あるみが あります。

「く」「リ」「カ」「ヤ」
「く」「フ十」「か」「ゆ」

早口ハレバ

ひらの ハレバを、早口で まちがえないようにな
って みましょう。

すもむも ももも むう うれた。
おやがめ 子がめ まゝがめ。
なまび」ぬ なまむれ なまたまゝ」。
わらべれ おれべれ わきぬれんくい。
竹やの 竹がきに 竹を たてかけた。

(新漢字 形 竹)

(033. 一ノ五)

ひつじかいと おかみ

ある 村に、ひつじかいの 子どもが いました。

毎日、おかの 上で、ひつじの ばんを して
いました。いつも ひとりぼっちなので あきて
しまいました。ふと 思いついて、

「たいへんだあ。6おかみが きたあ。たすけて

くれえ。」

と、大きな 声で よびました。

その 声を きいた 村の 人たちは、びっくり
して かけつけて きました。

おおかみは、どこにも いませんでした。

村の 人たちは、へんな かお
を して かえりました。

木の かげから、それを 見て
いた ひつじかいの 子どもは、

「おもしろい。おもしろい。」

と いつて 手を たたきました。

それから 四五日 たつて、

(新漢字 每 思)

(034. jpg)

また 村の 人たちを だまして やろうと
思いました。

「おおかみだあ。おおかみだあ。たすけて くれえ。」

ど、なんべんも 大声を たてました。

おどろいた 村の 人たちは、おおぜい おかの
上にかけのぼつて きました。ところが こんども
だまされた ことが わかつて、村の 人たちは、
かんかんに おこつて かえりました。

その つぎの 日でした。

ほんとうに おおかみが 出て きました。
ひつじかいの 子どもは びっくりして、
「おおかみが きたあ、たすけて くれえ。
ほんとうの おおかみだあ。」

と、ありつだけの 声で さけびました。

村の 人たちは、

「「んび」そ だまされないぞ。」

と いつて、だれも

たすけに 行きませんでした。



(035. jpg 横書き。縦表記)

じしゃく

ひでおくんは、にいさんに じしゃく を もらい
ました。

じしゃくには、ものを引きつける力があります。ひでおくんは、それをためしてみようと思つて、つくれの上にいろいろなものをあつめてきました。

コップ・古玉・はりがね・はさみ・石ころ・ガラスの玉・けしづむ・えんぴつ・マツチ・ボタン・びんのふた・かぎ・あきかん・毛糸・クリップ・こま・ペン先

などです。

じしゃくに、

引きつけられたものを

右がねに、

引きつけられないものを

左がねに、わけてみました。

(新漢字 引 古 玉 毛)



(036. → まよ 横書き。縦表記)

やこく ねえさんが 学校から かえつて
きました。

「ひでおさん、いいハンを おしえて あげるわ。

じしゃくで うおつりをするのよ。」

と いつて、その作り方を おしえて くれました。

うおの 形に かみを 切り、色を ぬつて うらに
クリップを つけます。

こんどは、みじかい ほうの 先に ひもを つけ、
その ひもに じしゃくを むすびつけます。

うおの 形の かみ

を つくえの 上に
ならべて、じしゃくの
ついた ぼうで それ
を つります。

おもしろいように よく つれます。友だちを
よんできて うおつりを して あそびました。

(新漢字 切 友)

(037. .j p g)

ジャックと まめの 木(かげえものがたり)

① むかし、ある ところに、
ジャックと いう 男の 子が、
おかあさんと ふたりで すんで
いました。ジャックの うちは、
びんぼうでした。

②ある日、おかあさんは、

「ジャックや 牛を うつて きて
おくれ。もう おかねが なくなつ
てしまつたからね。」
と いいました。

③ ジャックは、牛を うりに 行く
と中で にくやに あいました。

ジャックは、牛を にくやが もつて
いた きれいな まめと、とりかえ
ました。

④ ジャックは、いえに かえつて
まめを おかあさんに 見せました。
おかあさんは、おこつて まめを
まどの 外に なげすてました。

(新漢字 男)

(038. jpg)

⑤ つぎの 日、ジャックが 目を
さますと、まどの 外に 大きな
まめの 木が はえて いました。

ジャックは、まめの つるを
ずんずん のぼつて いきました。

⑥ やつと、つるの 先に つきました。そこは 如らない 国でした。
きれいな 女の 人が きて、
やさしく ジャックに はなしかけました。



⑦ 「むこうに 大きな しろが
あります。そこには、あなたの
おとうさんを ころして、たからも
のを とつた 大男が すんで い
ます。あなたは、たからものを と
りかえして いらつしやい。

⑧ 夕方、ジャックは 大男の
しろに つきました。まもなく
ドスン ドスンと 音を たてて

大男が かえつて きました。

ジャックは、いそいで

かまどの

うしろに かくれました。

(039. jpg)

⑨ 夜に なると、大男は、
たからものの めんどりを 出して
きて、「うめ」と いつて 金のたま
ごを うませました。ジャックは、
大男が ねむつたので めんどりを
かかえて、まめの つるを つた
わって かえりました。

⑩ ジャックは また 大男の ところへ 行つて、こんどは、金やぎんのは いって いる たからものの ふくろを とりかえして きました。

⑪ ジャックは、三ど大男のしろに行きました。こんどは かまの中にかくれました。大男は たてごとを もつて きました。「なれ



と いうと、なりはじめました。

なんとも いえない よい音です。

⑫ やがて、大男は ねむつて

しまいました。ジャックは そつと
かまから ぬけ出して、たてごとに
手を かけました。

たてごとは、

大きな 音を たてました。

(040. jpg)

⑬ 大男は、目を さました。

「だから のにわとりと ふくろを
とつたのも おまえだな。」と いつて、
おいかけて きました。ジャックは、
む中で にげました。まめの つるに
とびついて 下へ 下へ おりました。

⑭ ジャックは、地めんに つくと
すぐ、まめの 木を おので 切り
たおしました。

大男は、まつさかさまに おちて
きて しんで しまいました。



マンジオカの はなし

むかし、ある 村に 女の
あかちゃんが 生まれました。
かわいい あかちゃんでした。

おとうさんと おかあさんは、たいそう
よろこんで マニと いう 名をつけました。
マニは ずんずん 大きく なりました。
しばらく すると、よちよち 歩き出しました。
ものも いうように なりました。

(新漢字 地 生)

(041. .j p g)

おとうさんと おかあさんは
たいそう カわいがって
いました。

村の 人たちも、

「かわいい マニちゃん。」

「元気な マニちゃん。」

と いつて、マニの うちに
あそびに きました。

マニの たんじょう日が

ちかく なりました。はじめての たんじょう日



なので、にぎやかに おいわいを する ハンド
しました。おとうさんと おかあさんは、
「たぐせん バタバタを作つて、村の 人たちを

みんな よびましょう。」

と、毎日 たんじょうの ひと ばかり はなしで
いました。村の 人たちも、その 日を たのしみに
して まつて いました。

ある 日の ハンド、作つたのか マニは

(042. ハンド)

ちいさな わらわなく なりました。そして

ものも たべなく なりました。

おとうさんと おかあさんは、

たいそう しんぱいしました。

くすりを のませたり、

神さまに おいのりしたり

しました。けれども、マニは

少しも 元気に なりません。

そして、ハンド しんど しました。

おとうさんと おかあさんは、マニの からだを
だいて なきました。村の 人たちも みんな
かなしみました。

おとうさんと おかあさんは、にわに マニの



おはかを 作りました。

おとうさんと おかあさんは、

毎日 マニの おはかに

おまいりをして いました。

(新漢字 神)

(043. j p g)

ある 日、ふと 見ると
マニの おはかの 上に 一本の
木が はえて いました。

今まで 見た ことも ない
めずらしい 木でした。

その 木は、すぐに 大きく
なりました。

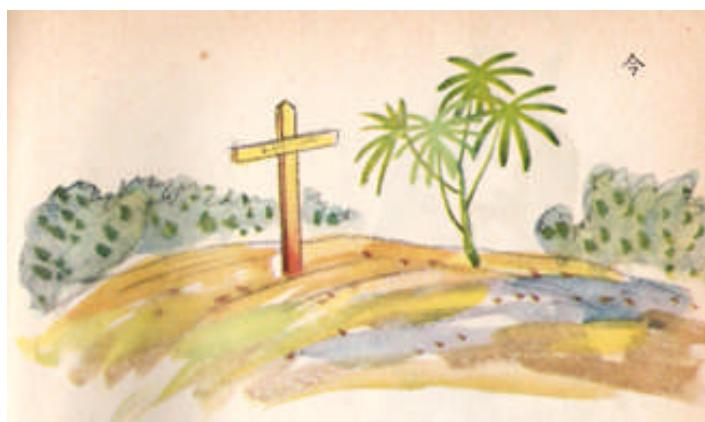
青青と したは が おはか
に かげを作りました。

その 木の ねもとを 見ると、土に われ目が
ありました。

そこを ほって みました。すると、太い ねが
いくつも 出て きました。

かわを むいて みると、それは
まつ白な いもでした。

(新漢字 今 太)



「これは神さまが、マニの かわりに
くださったのに ちがいない。」

と、おとうさんは おもいました。

その いもを にて たべて みました。

たいそう おいしい いもでした。

おとうさんは、この いもに、

マンジオカと いう 名を

つけました。

マンジオカを、村の 人たちに わけて
あげました。村の 人たちも、大よろこびで
マンジオカを たべました。そして マンジオカを
うえて ふやしました。マンジオカは、どんな
かわいた 土地にも そだちました。

これまで、日でりが つづくと、村の 人々は、
たべものに こまる ことが ありました。けれども、
マンジオカを うえるように なつてから、日でりが
つづいても、たべものに こまる ことが
なくなつたと いう ことです。

あいうえおの うた

アバカテ うえましょ あい
 カナリア きてなけ きく
 サボンで せんたく さす
 タマンコ カタカタ かけ
 ナタール うれしい く
 はいと おへんじ え
 マモンの みがなる う
 やしのみ おいしい え
 ランベリー つれた お
 わにの目 こわいな う
 ガンソの なき声 え
 ざくろも はじけた お
 ダリアは だいすき う
 バンビよ とべとべ そ
 パパガイオ ピカパウ そ

ぱ ば だ ざ が わ ら や ま は な ち つ せ そ こ
 ぴ び ぢ じ ぎ い り い み ひ に ぬ て ね の と
 ぶ ぶ づ づ ぐ う る ゆ む ふ ぬ へ ね ほ の
 ペ べ で ぜ げ え れ え め へ ね ほ の
 ぼ ぼ ど ぞ ご を ろ よ も ほ の

手がみ（いなかみ）に 行つた とおるくんから きた

たけおくん、

ぼくは、きのうから おじさんの うちに きて
います。おじさんの うちには、広い 広い コーヒー
えんの 中に あります。やさいや くだもののは
はたけも あります。やさや ぶたも かつて います。
きょうから おじさんの うちの のぶおくんと
いつしょに、やさの セわを します。

ふたりで えさを もって いつて やります。
やさは、口を もぐもぐ わせて たべます。

ひるから みかんばたけに 行きました。おいしい
みかんを いくつも たべました。

夜は しづかで むびしいくらいです。
十日ぐらい とまって かえります。

七月四日 とおる

たけおくん

(みなとに 行つた よしえさんから きた 手がみ)

ローザさん、

わたしは、今 サントスに きて います。

おじさんと おばさんが、日本へ 行くので、
おとうさんと 見おくりに きたのです。きのう、
おじさんたちと いつしょに、ふねに 行きました。
日本の ふねで、大きな ふねです。
中には 広い サロンが いくつも ありました。
きれいな しょくどうも ありました。

日本へ 行く 人が、たくさん のつて いました。
ふねが 出る とき、たくさんの テープが、
ひらひらして とても きれいでした。

あしたは、サントスの 町を けんぶつします。
かいがんに行くのが たのしみです。

七月七日 よしえ

ローザさん

(048. jpg 右 pg 題名横書き。上段下段あり。)

日のよみ方

(上段) 日(ついたち)(いちにち)

日(ついたち)(いちにち)

日(ふつか)

日(みつか)

日(よつか)

日(いつか)

日(むいか)

日(なのか)(なぬか)

日(ようか)

日(ここのか)

日(とおか)

日(じゅういちにち)

(下段)

十一日(じゅうににち)

十三日(じゅうさんにち)

十四日(じゅうよつか)

十五日(じゅうごにち)

十六日(じゅうろくにち)

十七日(じゅうしちにち)

十八日(じゅうはちにち)

十九日(じゅうはちにち)

二十日(はつか)

二十一日(にじゅういちにち)

三十日(さんじゅうにち)

かもに なつた ジンベえさん

ある ところに、ジンベえと いう 男が いました。ジンベえさんの いえの ちかくに、大きなぬまが ありました。秋に なると、たくさんのかもが、南の 方から あそびに きました。

ジンベえさんは、その かもを とるのを しげ」とに して いました。毎日、一つ わなを しかけて、一わづつ とつて いました。

ある 日、ジンベえさんは かんがえました。

(新漢字 秋 南)

(049. .j p g)

「毎日、一わづつ とるのは
めんどうだ。一日に 百ぱ
とろう。そして あとの

九十九日は、あそんで いよ
う。その 方が らくだ。」

ジンベえさんは、一生けんめ
いに わなを 作りました。

そして ある ばん、ぬまに 百の わなを しか
けました。どの わなも、一本の なわに つなぎ
ました。ジンベえさんは、その なわの はしを



しつかりと にぎりました。そして かもの くる
のを まって いました。

よあけごろに なりました。かもが たくさん
ぬまに おりて きました。かもは つぎつぎに
わなに かかりました。「んべえさんは、大よろこび
です。わなに かかった ものを かぞえました。
かもは、みんなで 九十九わ かかるって いました。
「よし よし。もう あと 一わで 百ぱだ。」

(新漢字 生)

(050. jpg)

「んべえさんは、百ぱに
なるのを じっと まって
いました。

ところが、あの 一わが
なかなか かかりません。

そのうちに、とうとう
よ が あけて しまいました。
日の 光が さつと ぬまに
さして きました。

すると、かもは 一どに ぱつと とびたちました。
わなに かかつて いた 九十九わの ものが、
いつしょに とびたちましたから、なわのはしを



にぎりて いた ごんべえさんは、引き上げられました。九十九わの かもの 力で、空高く 引き上げられて しました。

かもは、野を こえ 山を こえ、北へ 北へと、とんで いきました。

ごんべえさんが、下を 見ると、いえや 森が

(新漢字 野 北 森)

(051. .j p g)

小さく 見えました。

「たすけて くれえ。」

と 大声で さけびながら、空を とんで いきました。

そのうちに、なわが プツンと 切れました。ごんべえさんは、まつさかさまに 空からおちて いきました。

ところが、おちて いく と中で ごんべえさんのからだが、きゅうに 小さく なりました。はねが はえて くちばしが できました。

ふと 気が つくと、ごんべえさんは、かもになつて 空を とんで いました。

かもに なつた ごんべえさんは、おなかが

すいて きました。どこかに おりて、なにか
たべたいと 思いました。

むこうに、ぬまが 見えました。

(052. jpg)

かもに なつた ジンベえさん
は、その ぬまに おりて
いきました。

ぬまには、うおが およいで
いましたく うおを とつて
たべようと 思いました。

すると、何か 足に
ひつかかりました。

見ると それは わなでした。

ジンベえさんが、いつも つかつて いた わな
でした。その わなに 足を しばられて、うごけ
なくなつて しまいました。

かもに なつた ジンベえさんは、かなしく なり
ました。今まで、自分が とつた かもの ことを
思い出しました。そして、

「ああ、わたしが わるかつた。」

と いいながら、ぽろぽろ なみだを こぼしました。
なみだは、ほおを つたわって おちました。



(新漢字 自)

(053. jpg 右 pgのみ)

なみだは、足を しばつて
いる わなを ぬらしました。
すると、わなの なわが 切れ
ました。『んぐえさん』
からだは、もとの にんげんに
なりました。

それから のち、『んぐえさんは、かもを とる
のを やめました。そして、正じきで やせしい
人に なりました。

(新漢字 正)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
89	みかんばたけ しづか さびしい	97	北	101	しばられ (しばる) かなしく (かなしい)
90	みなと (港) サントス 見おくり サロン				こぼし (こぼす) なみだ
91	しょくどう テープ とても けんぶつ かいがん	102	ぬらし (ぬらす) にんげん (人間) のち (後) やめ (止める)		正じき (しょうじき)
93	ぬま (沼) 秋 かも 南 しごと めんどう らく (楽) わな どの なわ				
94	一生けんめいに				
95	はし (橋) よあけ (夜あけ) ごろ (頃) つきつき				
96	さして (射し) そのうちに				
97	すると 野 こえ (越す)				

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
47	うまく(うまい)	55	なおらない(癒る)	61	さびくぎ
	ひっつきりなし	56	ぴょう気		おれくぎ
48	大せい	57	やすい(易い)		ひきぬき
	会しゃ(かいしゃ)	58	みまい(見舞)		(ひきぬく)
	ぎんこう				
49	りっぱ	58	ひらがな		にくい
	あかるく (あかるい)		かたかな		竹
	におい		ふたどおり (二通り)	62	ひとつじかい(半飼)
	本や(本屋)		ふだん		おか(岡)
	レストランテ		ならった(ならう)		ひとりぼっち
	シネマかん		名(な)		あきて(飽きる)
50	百かでん		アメリカ		たすけて(助ける)
	みやげ		ボルトガル	63	たって(経つ)
	ネオン		アルゼンチン		かけつけて
	よう(様)	59	ブラジリア	64	だまして(だます)
51	やし(椰子)		ペレン		大声(おおごえ)
	アバカテ (ABACATE)		ピアノ		おどろいた
	もも(桃)		コスモス	65	ほんとう(本当)
	つばき(椿)	60	やぎ(山羊)		ありったけ
	やなぎ(柳)		かたち(形)		……こそ
	うえる(植える)		にた(似る)	66	じしゃく
	ゆれる		かくばって		引きつける
	かれる(枯れる)		(角ぼる)		ためして(試す)
	53		まるみ		コップ
	めだか	61	早口(はやくち)		古くぎ
	そつと		まちがえ		はりがね
	ゆうぎ		(まちがえる)		石ころ
	54	かぜ(風邪)	すもも		ガラス
	ひかない(ひく)		うれた(熱れる)		玉(たま)
	くしゃみ		なまごめ(生米)	67	ボタン
	55	サウデ(Saude)	なまむぎ(生麥)		びん(瓶)
			なまたまご(生卵)		ふた(蓋)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば	
67	かぎ(鍵)	74	ふくろ(袋)	83	われ目	
	あきかん	75	かま(釜)		いくつ	
	クリップ		やがて		まっ白	
	ペン先		ぬけ出し		いも(芋)	
	……られ		(ねけ出す)	84	かわり(代り)	
	右がわ		たてごと		にて(煮る)	
	左がわ	76	おまえ	85	ふやし(ふやす)	
	わけて(分ける)		おいかけ		かわいた(かわく)	
68	うおつり		(追いかける)		土地	
	作り方		地めん(地面)		そだち(そだつ)	
	みじかい		おの(斧)		日でり	
	ひも(紐)		たおし(たおす)		つづく(続く)	
	むすび(むすび)		まっさかさま		たべもの	
70	まめ(豆)		しんで(死ぬ)		こまる(困る)	
	すんで(豆)	77	マンジョカ	86	カナリア	
	びんぼう		(MANDIOCA)		サボン(SABÃO)	
	かけえ		78	たんじょう日	ナタール(NATAL)	
	ものがたり		79	いわい(祝)	み(実)	
	かね(金)		たのしみ	87	なき声(鳴き声)	
71	にくや(肉屋)	80	しんばい		ざくろ	
	とりかえ		のませ(のませる)		はじけた	
	(とりかくる)		神さま		(はじける)	
	なげ(なげる)		いのり(祈る)		ダリア	
72	はえ(生える)	81	かなしみ		だいすき	
	73	しろ(城)	(かなしむ)		バンビ	
	たからもの		まいり(まいる)		バンガイオ	
	大男		82	今(いま)	(PAPAGAIO)	
	かまと		めずらしい		ピカバウ	
74	めんどり		青々(あおあお)		(PICA-PAU)	
	生め(生む)		83	ほって(掘る)	88	いなか
	かかえ(抱くる)		太い(ふとい)		コーヒ一えん	
	つたわづく(伝う)		ね(根)		せわ	

おもなことば

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
4	まいり (まいる)	10	立って (立つ)	18	では
	さそい (さそう)		ひっこし		ズボン
	まって (待つ)		……ばかり		うねぎ
	みち (道)	11	でん車どおり		きもの
5	にこにこ		ひどく (ひどい)		おび
	あいさつ		かた (肩)		カデルノ (Caderno)
	一年生		だいて (だく)	19	かっぱ
	つれて (つれる)		しづく		糸
	なで (なでる)		せなか		ミシン
	はずかし (はずかしい)		半分		はり (針)
6	なわとび	12	よせあって (寄せあう)	20	かに (子がに)
	ほっぺた		ときどき		とび
	そろって (そろう)		そば (傍)		貝がら
7	しょうか		どろ水		21 どつち
	たのしい	14	夕はん		わからない
	うた声		ようい (用意)		(わかる)
	きょうしつ	15	前	22	少し
	いっぱい		なき (泣く)		かきわけ
	ひびき (ひびく)	16	あつまって		(かきわける)
8	やっぱり				小川
	ひとりごと	17	はやい	23	先
	ひるごはん		せんろ		ふる (縁)
	出かける		夏	24	ちょっと
	かさ (傘)		冬		しっかり
9	おわって (おわる)		さとう	25	おいだ
	やみ (やむ)		あまい		ふく
	さむく (さむい)		しお		かもめ
	げんかん		からい	26	大じょうぶ
	しんぶん		高い		すみ (隅)

ページ	ことば	ページ	ことば	ページ	ことば
26	ひりょう	33	じこく (時刻)	38	はなれて (はなれる)
27	けさ		知らせ (知らせる)		わた (綿)
	ぴったり	34	たてもの	39	エストラーダ (ESTRADA)
	しま (橋)		とけい台		けん (軒)
	ふたば		でんち (電池)		しばらく
	ひらいて (ひらい)		ゆびわ	40	やきゅう
	のびて (のびる)		むかし	41	おじさん (小父さん)
28	め花		かけ		カミニヨン (CAMILHÃO)
	とげ	35	はかる (計る)		ア mendoin (AMENDOIN)
	なんかい (何回)		日どけい		おろして (おろす)
	しようどく		すな (砂)		どれた (取れる)
	つる (暁)		すなどけい		おくられ (おくる)
	いきいき		たたしい	42	いいえ
29	もいで (もいく)	36	かみなり	42	これ
	なんだか		ふえ (笛)		わかれて (わかる)
	氣		きょうかい (教会)		あてる
30	木立 (こだり)		かね (鐘)		そうだん
	すぎて (すぎる)		花火		しつもん
31	木のは (このは)		のりもの		あたれ (あたる)
	ふるわせ (ふるう)		たてる	43	おわり
		32	ほえて (ほえる)		まけ (負)
			やさ		きまり (きまる)
		つけ (つけらる)	あまえ (あまえる)		45 きめ (きめる)
		うで	あひる		46 黒い
		うでどけい	さんぽ		色 (いろ)
		おきどけい	本ばこ		47 黒ばん (こくばん)
		33	にぎやか		
			すいた (すく)		
		ふりこ (振子)	38	組合	
		でん氣			
		さま	かいもの		
		ベル	村 (むら)		
		しきけ	えき		
		オルゴール	ずっと		

あたらしい かんじ

の しるしは まえに ほかの
よみかたで 出たもの

4	5	5	5	6	6	7	8	9
行 い	田 た	先 せん	一 ねん	学 がく	音 おと	合 あ	雨 あめ	天 てん
つ つ	中 生	せい	年 ねん	校 こう	わせ	わせ	き	気 き

11	11	11	12	15	15	16	16	16
でん 車	歩 ある	半 はん	平 へい	回 まわ	前 まえ	字 じ	空 そら	広 ひろ
しゃ	き	ぶん	き	つ	て	じ	い	い

16	17	17	17	17	17	19	20	20
花 はな	汽 汽	長 なが	夏 なつ	冬 ふゆ	高 たか	糸 いと	休 やす	貝 かい
車 くるま	い	い	い	い	い	む	む	い

20	21	22	22	22	23	25	25	31
早 はや	虫 むし	少 すこ	知 し	林 はやし	先 さき	見 み	元 げん	風 かぜ
く	し	し	つ	に	に	あ	き	ぜ

34	34	35	38	38	39	40	40	41
作 つく	台 だい	夜 よる	組 くみ	村 むら	会 かい	と と	馬 うま	品 しな
つ た		る	合 合		か ん	ちゅう		もの

41	46	46	47	49	49	50	58	58
町 まち	黒 黒	色 いろ	黒 こく	千 千	何 なん	百 ひゃく	国 くに	名 な
い	ば			せん	で		に	

59	60	61	62	62	66	66	66	67
書 き	形 けい	竹 たけ	毎 まい	思 おも	引 ひ	古 ふる	玉 たま	毛 け
		日 曜	い	き		く	ぎ	
68	69	70	77	76	80	82	83	85
切 き	友 とも	男 おとこ	生 う	地 じ	神 かみ	今 いま	太 ふと	土 ど
り	だち		ま	ま	さま	い	い	ち
93	93	94	97	97	97	101	102	
秋 あき	南 みなみ	一 い	野 の	北 きた	森 もり	自 じ	正 じ	
		生 う				分 ぶ	き	

今までに ならった かんじ

(1) 一二三四五六七八九十
日小木下川大上月子手
足中牛人

(2) 石方出水赤青土口夕走
目耳左右女光外見声力
本火白立金犬入山

内 容 に つ い て

ペーパー

4~5

おはよう 一年生に進級したよろこびを、一年生のかずえちゃんを さそつてあげたことと、おはようのあいさつの中に、表現した文である。学年の初めを明るく楽しく出発するように、採用したもので、新学年のようにじびを 読みとらせる。

6~7

学校で 新学年の楽しい学校生活を主題とし、はじめは休み時間、つぎに音楽の時間で、朗読練習を目的とし、学校生活の楽しさを読みとらせる。

8~13

雨ふり 丶の文は下級生への友情を主題としたもので、マリオくんが一年生を、かさに入れていつしょに帰つたことの作文である。自分の経験を順序よく素直にかく書き方を学習させる。

14~15

けんちやん 弟のおもりをした手伝いの経験を、短くまとめた作文。雨ふり、けんちやんの両文の読みとりによつて、各自の経験を、まとまつた文に 書けるようになる。

16~19

ことばあそび 室内で楽しく遊びながら、ことばの諸能力を高めるために取り入れたもので、特に語いを拡げ、ことばの使い方に関心をもたせる。

20~25

「ひきの 子がに ひきの子がにが山から海に帰るまでの短い物語で 強いかにと弱いかにの対照的な心情と、助け合つて仲よく、進んで行く情景とを読みとらせ る。「下く下く」「少ししか」「かきわけ」「川のふち」「しつかり」「ゆく」「大じょっふる」などの、語を理解させる。

26~27

きゅうりの につき きゅうり栽培の継続観察である。「日本語(2)」の絵日記を発展させて、絵日記式の記録のしかたを理解させる。観察物を主体にして、変化をこまかく記録する」とを教える。「ぴたりと手を合わせたよ

うな」「あたば」「いきいき」などの語を理解させる。観察記録を書くよう指導したい。

30～31 風 風の歌を通して、歌詞特有の表現形式になれさせること。「木のは」「木立」の読み方に注意する。左横書きの文にも触れさせる。

32～35 とけいのいろいろ 日常生活から、切り離すことのできない、時計についての説明文である。種類および用途を教え、時計に親しみを持たせ、また時刻に关心を持たせる。

36～37 音 声 物音とか鳴き声などの擬音語に注意を向けさせると同時に、かたかなによる表記になれさせる。実際に音や声を聞かせ、注意深く聞き、観察する態度を養う。

38～41 組合 組合におつかいに行つた生活作文。農村生活の一部としての組合を取り上げ、親しみと理解を持たせる。「組合」「村」「余がん」などの語を理解させる。

42～47 はいと いいえ 文によつて遊びの方法を知らせ、「」とばに关心を持たせる。

47～50 サン・パウロ 都会について理解を持たせ、自分たちの村や町について話し合いをさせ。「ひつきりなし」「まつしり」「公社」「銀行」「レストランテ」「百かてん」「ネオン」などの語を理解させる。

51 木 樹木の名まえを教え、木の字の使い方を正しく理解させる。「木ました」などに使わないように。

52～53 めだかの学校 具体的に様子をつかませて、詩的表現のおもしろさを味わわせる。作文指導にも用いたい。「見てごらん」の使い方を理解させる。

54～57 かぜを ひかないように 健康に注意する態度を養ふ。児童のかかりやすい病気の予防について指導する。友

人が病気になつた場合の態度についても教えたい。

58～60

ひらがなど　かたかな　かたかなと　ひらがなを対応して、知識を整理させ、かたかなの用法を理解させる。例は示して徹底させたい。

61

早口」とば　正しい発音で、はやく讀う能力を養う。

62～65

ひつじかいと　おおかみ　文の内容を確實に読み取れるようにする。読んだ話を人に話して聞かせ、また読後の感想を発表させる。「ひとりぼっち」「だまして」「かんかんに」「ありつたけ」「こんどりそ」などの語を理解させる。

66～69

じしゃく　ひでお君がにいさんにもうつたじしゃくで遊んだことを作文形式にした説明文、理科的な内容を正しく読みとらせ、じしゃくに興味を持たせ、各自に実験研究をさせたい。また、左横書きの文を読みなれるよう指導する。

70～85

ジャックと　まめの木　マンジオカの　はなし(かげえ物語)やや長い物語を、最後まで読み通させることを目的として、イギリスの昔話とブラジル民話の一編を取り上げた。前者はさしえを中心に、物語の段落が分けられるようにする。後者は民話、物語などに興味を持たせ、読書意欲を起こさせる。

85～87　　あいうえおのうた　楽しく明読しながら五十音表を
讀得させる。

88～91　手紙　やや複雑な内容の手紙を読解させる。手紙の書か方は、「要点を落とさず、簡潔にまとめる」とを教え、手紙を書く実践学習にまで、発展させたい。

92

日のよみ方　一日から三十日までの正しい日の読み方を数える。

内容を理解する。童話を読む楽しさを味わわせ、教科書以外の読み物を読むように導く。発音や抑揚に注意して郎読させる。主人公の心理的な動きが読みとれるように指導したい。それを感想文などに書かせるのもよい。

先生と父母へ

この教科書は、話す、聞く、読む、書くの四つの力が、身につくようになると考える力が、確かなものになるようにとってこのを目的として、編集しました。

取材範囲は、学校および家庭生活を中心とし、都會と農村の社会的な姿の認識を持たせるに役立つものを、取り入れました。

文章 複文が多くなっていますが、文の構造をしつかりとつかませるように、留意しました。

文字と言葉 漢字は日本の現行教科書より少し多く出してあります。新出七十三字、読替七字、語法教材として「」と「あそび」などを掲げました。

まず、基本的なことばを充分に学習させ、敬語についてはこれまで、多少ふれてきましたが今後はつきり提出するつもりです。

内容 社会科、理科にぞくする題材が多くしてあります。童話も、日本、ブラジル、その他の国々のものを掲げ、学習に興味を覚えさせるように考慮しました。

元文部省図書監修官

監修林 実
(在東京)元

編集執筆 (ABC順)

武坂岡加二古
本田 藤木野
由忠 崎 千秀 菊
夫夫 重人 生
親 予

表紙・挿絵 (ABC順)

渡土玉高石星星
橋 川ル
辺屋城 ス リ
卓イセ
優韶治ン剛子弘

日本語 (3)

一一九
九六〇年十二月十五日
六年九月二十日 再発行

定価

著作者 日伯文化普及会

日本語教科書刊行委員会

発行者 日伯文化普及会

ブラジル、サン・パウロ市、

サン・ジョアキン街三八一

東京都千代田区神田神保町三ノ二九

印刷者 株式会社帝國書院

代表者 守屋紀美雄

発行所 日伯文化普及会

ブラジル、サン・パウロ市、

サン・ジョアキン街三八一

